



二十歳のつどい会場前で、シール投票。対話する場面(=11日、SSプラザせんだい前)

議員・商工会の意見交換

暮らしと商売を立て直す基盤を立て直しを ―人手不足、交通、入札、空き家

薩摩川内市商工会が議会(議会2班・生活福祉委員会)と意見交換し、人口減少が郡部に集中する中で、事業継続の危機と具体的改善策を訴えました。人材確保、島の交通、公共工事制度、老朽建物・空き家など、暮らしと商売を支える基盤を立て直しが急がれます。

「仕事はあるのに人がいない」制度も現場に合わず

意見交換会では、商店街の衰退や事業承継の困難が語られ、「この先も商売が続くのか」と不安の声が相次ぎました。とくに深刻なのが人手不足です。甌島では

進む一方、老朽空き家(二面に続く)



議員と商工会の意見交換(=14日、入来 ※写真は合成)

二十歳の声―シール投票で見えた不安と希望

1月11日、薩摩川内市の「二十歳のつどい」会場入口で、井上勝博市議と党員が若者に「最近の世界のニュースをどう感じていますか?」とたずねるシール投票を行いました。協力者は65人。結果は①「正直、あまり気にしていない」18人、②「希望を感じることもある」13人、③「不安を感じる」34人、④「不安」が最多でした。①では「初めての女

性首相に期待」「だんだん日本は良くなっている気がする」などの声。②③では「世界が戦争になりそう」「物価が高い」「税金が高い」「賃金が少ない」「なんとなく不安」など、暮らしと将来への切実な思いが寄せられました。政治や社会への関心が確実に高まっていると感じます。井上市議は「若者との対話と学びの輪を広げたい」と語りま

こちらくらしの相談所
(No. 636)
携帯 080-3996-0237 (井上)
なんでもご相談ください。



92歳の叔父からの電話―青本」に驚いた、という話 生活相談コーナー「こちらくらし」ですが、今回は個人的にうれしかった出来事を報告します。年始に届いた年賀状をきっかけに、92歳になる神奈川県在住の叔父から突然電話がありました。叔父は、「同じ団地の人にすすめられて、高校生に戦争体験を語る活動をしている」と言います。その方は、どうも共産党員らしい、とも。さらに、その人の勧めで「しんぶん赤旗」日曜版を読み始め、志位和夫議長が書いた『Q&A 共産主義と自由』(通称「青本」)まで読んだというのです。叔父はこう続けました。「共産主義社会は、個人の自由を縛るものだと思っていた。でも『青本』を読んで、まったく違うことに驚いた。あなたの年賀状が届いたので、電話したくなつた」電話口の叔父の声は明るく、言葉に力がありました。こちらが励まされる思いでした。「青本」に事実と道理で問いに答える力がある、ということでした。身近なところで読まれ、対話が広がっている―その一端に触れた出来事として、うれしく報告します。

薩摩川内市消防出初式

団結と誇り、川内川にびびく

10日、一斉放水の写真は、出初式のクライマックスを飾る場面です。川内川の対岸から撮影され、消防車両がずらりと並ぶ堤防沿いから、複数の放水が一斉に空へ立ち上がっています。白い水の弧が冬空に連なり、遠くからでも放水の力強さと規模の大きさが伝わってきます。



一斉放水(=10日、川内川河川敷)

この一斉放水は、消防の機動力と部隊連携を示す象徴的な訓練展示です。河川敷という開けた舞台に、水しぶきが光を受けて立ちのぼる様子は、地域を守る決意と新年の防災への誓いを印象づけています(小林健市議提供)。



エプロンおばさんの 簡単クッキング (690)

大根と手羽元のとろみ

材料 (2人分)

大根: 300g、手羽元: 6本 (約350g)、A (水: 2と1/2カップ、しょうゆ: 大さじ2、みりん: 大さじ2、酒: 大さじ2、ごま油: 大さじ2)

作り方

- ①大根は皮をむき、乱切りにする。耐熱ボウルに大根と水1/4カップを入れ、ふんわりラップをして電子レンジ(600W)で5分加熱する。加熱後、残った水は捨てる。
- ②鍋に①と手羽元、Aを入れて中火にかけ、沸騰したら弱めの中火にする。約20分、時々混ぜながら煮る。
- ③塩小さじ1/2、こしょう少々で味を調える。

(二面から続く)

ばかりで住居確保が難しく、公営住宅の運用を柔軟にしてほしいとの要望が出されました。

と商売を直撃しているとして、連絡交通の改善を求めました。建設業からは、合併後の入札制度が現場の実態に合わず、行政からの調査・設計・見積依頼が「実費ゼロのサービス」になっていくと指摘。調査費の支払いなど制度見直しを提起されました。

物が放置され、景観や安全、観光にも悪影響が出ています。撤去や活用に向け行政が動く仕組みづくりも求められました。

参加者は「一回で終わらせず継続して議論を」と訴え、議会側も課題を共有し具体策に結びつける姿勢を示しました。

No. 66



シネマ太郎の映画評と案内 永遠の人 (1961)



永遠の人



疑惑

黒澤明、小林正樹、市川崑、山本薩夫といった巨匠監督作品での演技、「野獸時代に死す」(1968)というイタリア映画で演じた極悪人など、強烈な印象を残した俳優・仲代達矢が昨年11月に92歳で亡くなりました。年末にはNHKで黒澤明監督作の主演映画「乱」(1985)、「影武者」(1980)が放映されていきました。彫りの深い彫刻のような顔つき、ぎよろつとした目、朗々とした低い声。心を見透かされそうなお睨み。日本を代表する俳優であり、屈強な男性を多く演じました。が、異色な感じを受けたのが木下恵介監督「永遠の人」(1961) (昭和36)年公開)。熊本・阿蘇の大自然の中の農村を舞台に、昭和7年から昭和36年までを五つの章に分け、年代記のように夫婦の確執と取り巻く人間関係を描いています。仲代達矢は戦地で足を負傷し、復員した大地主の息子を演じていて、妻(高峰秀子)との30年以上に及ぶ憎しみに満ちた生活、波乱の人生が怒濤の展開で進みます。仲代達矢は白塗りのような表情で、憎たらしい口々夫を演じているのですが、哀れさも感じさせ、隠れた名演だと思えます。天下のイケメン、佐田啓二の顔のよさ、中学生の息子役、田村正和の初々しさ。みんなが熊本弁。そして驚くのが音楽。フラメンコギターに合わせて熊本弁での語り。まるで浄瑠璃の語りのように。主演は高峰秀子なのですが、屈折した心情の夫役・仲代達矢が、裏の代表作ではないかと思うような異彩を放っています。映画は高く評価され、受賞はしなかったものの1962年アカデミー賞外国語映画賞にノミネート。配信でみるのができます。さて気になる次の映画は、川内まごころ文学館で上映の松本清張原作、野村芳太郎監督の2作。1月17日が「砂の器」(1974)、18日が「疑惑」(1982)。みられた方が多いとは思いますが、スクリーンでぜひ。「疑惑」は当時、絶頂期のふたりの女優(若下志麻の桃井かおり)の火花散る演技が見ものです。



←中俣先生のブログはこちら

中俣先生の つれづれなるままに (821)



「今年も、きずな」を通して、よりいっそう心温まる、楽しいエッセイを目指して頑張りたいと思います」と、あえて書いたのには理由がある。昨年の「文化薩摩川内市」の、最後の編集会議のときのことがあったが、「文化薩摩川内市」に書いていた記事のことかと思つて、「いえいえ」と軽く聞き流していたが、そうではなく、きずなエッセイのことだと、その時の話の内容で分かつてドキッとした。館長さんは温厚な紳士然とした方で、こんな方まで熱心に「きずな」を読んでいらつしやるのか、これは油断ができないぞと思つたのである。「きずな」は維新の会に言わすれば政党機関紙となろう。ところがそうではない。くれつきとした普通の小さな新聞だと思つている。だから党のことも書くが、それ以上に、日常のありふれたことも書く。特に私は小さいころから、人を見て、その人の生活のありようを想像するのが好きだった。ああ、この人は田舎に住んでいて、子どもが人いるなと勝手に想像し、物語を創っていく。そうすれば電車の旅も楽しい。年末の「石ころの女」もそうしたなかで生まれた。盗撮なんてよこしまなことは考えない。素敵な女性に出会っても眺めて思い力に富めるのが一番いい。想像だ。(詩愛好家)